

サッカー、メレディス、ジェイムズそして漱石

—— フランス式結婚をめぐる ——

河 村 民 部

これからお話ししようとするのは、French system とメレディスが呼び、ジェイムズが French way と称する、イギリス人にとって、そしてまたアメリカ人にとっても、このうえなく厄介な（と日本人の私には思える）、19世紀フランスにおける結婚のあるシステムをめぐる小説についてである。そのシステムとは、手っ取り早くいうと、まだ十代後半の若い娘をかなり年のかけ離れた、時にはその娘の父親に等しい程の年長の、社会的地位身分のある者と婚約させ、娘の将来を親が早々と決めて、安心しようというものである。つまり、娘個人の自由意志よりも親の意志および家の「名誉」が先行する結婚習慣である。総じて娘は親の「名誉」を守るべく己の意志を犠牲にして、親の取り決めに従うのである。ある意味では日本の「お見合い」にも似ている。

それがイギリスの偉大な小説家三人によって、それぞれの代表的な小説に、イギリス的批判精神をふんだんに盛り込んだ形で取り入れられ、主人公ないしは重要人物の一生を変えてしまう働きをさせられているのであるから、読者としては、これをみすみす見過ごすわけにはいかない。ところが、浅学な私の知る限りでは、どうやらこれがイギリス小説の伝統において、しかるべく注目され、正当に陽の目を見ているようには思えないのである。そこで、イギリス小説にあっては特殊な意味を持つと思える「フランス式結婚制度」なるものの跡を辿ることによって、小説史上看過されてきた空白部分を補おうというのである。

その御三家とは年齢順にいくと、あるいは作家的経歴の順にいくと、W. M. サッカレー (W. M. Thackeray, 1811-63)、ジョージ・メレディス (George Meredith, 1828-1909)、そしてヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) である。正確に言うと、ヘンリー・ジェームズはイギリスに帰化はしたが、もともとアメリカ人であるから、彼は二人の先達の影響下に、同じテーマで、今度はアメリカ人を主人公にして小説を書いたといった方がよい。アメリカ時代の少年ヘンリーにとってサッカレーは、ニューヨークの彼の家を訪れて、少年ヘンリーに「途方もなく大きな」人という印象を与え、真鍮のボタンをずらりとつけた服を着ていたヘンリーを「ボタン君」とあだ名した「偉大なるユーモア作家」であることを、ジェームズは後年『ある少年と他の人々』(*A Small Boy and Others*, 1913)^{註1}において回想している。そのように大家サッカレーと少年ヘンリーとの出逢いは古い。

それだけではない。比較文学的にいうと、特に後者の二人、つまりメレディスとジェームズとは極めて縁の深い日本の小説家がいるのである。いわずと知れた夏目漱石である。漱石の小説にも親の決めた結婚、あるいは義理に駆られたような結婚を無理矢理させられる、あるいはさせられそうになる、ケースがしばしば登場する。つまり日本的「お見合い」形式の結婚方法であり、これはフランス式結婚方法とくしくも酷似した内容を持っている。従って御三家に漱石も加わって頂くこととしよう。御三人の誰と比較してもいささかも遜色のない漱石殿であってみれば、ご本人も彼らの仲間入りを、まさかイヤとはおっしゃるまい。

先ずはサッカレー殿のことから始めよう。

W. M. サッカレーの小説に、『ニューカム家の人々』(*The Newcomes*, 1853-55) というのがある。その中で、この小説の主人公の父親に当たる男が、その若き日に、フランス式結婚制度と義母の反対から、愛するフランス

娘と結婚が出来ず、両親を置き去りにして、イギリスを立ち、インドに赴いた経緯が語られる章（第二章）がある。

この男はイングランドの北部からロンドンにやって来た機織職人トーマス・ニューカム（Thomas Newcome）の最初の妻との間に生まれた息子である。実母はまもなくみまかり、父トーマスは息子と乳母のセアラ（Sarah）と三人でロンドンの南郊外のクラパムに住み、商いを続ける。もともとトーマスがロンドンに出て来て働き始めた店が、織物仲買人をなりわいとする大金持ちのホブソン兄弟商会であり、一度はここから独立して己の働き口を見つけ、結婚したのであるが、妻に死なれてからトーマスは、ふたたびホブソン家との付き合いを始め、やがてはソフィア・アリシア・ホブソン（Sophia Alethea Hobson）という信仰熱く、慈善事業に没頭している娘、ホブソン家の後継者であり新しく設立した銀行のオーナーであるオールドミス（41歳）と再婚することになった。

こうしてトーマス氏は大金持ちで権勢ならびない商売人のホブソン家のパートナーとなり、再婚相手との間には2年後に双子の男の子をもうけるのであるが、長男のトミー君（Tommy）は義理の母との間がうまくいなくなり、いさかいを起こしてばかりであったのを、ロンドンの学校グレイ・フライアーズ（Grey Friars）に寄宿することになる。

だが学校での学問の方ではウダツが上らず、むしろ軍人になり、インドに赴くことを熱望するトミーに、父は騎兵隊士官候補生の身分を手に入れてやる。そこでトミーはロンドンの学校を辞め、数学に築城学、そして特にフランス語の修得に専念する。フランス語の勉強は、本来の家庭教師についてよりも、革命の亡命者であるブロワの騎士（the little Chevalier de Blois）と呼ばれる軍人の住まいに出かける方を好んだ。というのもそこには美しい娘が二人いたからであった。

そのうちの一人、レオノール（Leonore）嬢にトミーは恋をするが（二人とも18歳）、レオノールはフランスの躰のよい娘であり、そのような娘の例

に漏れず、父親の選んだ年長（なんと父親よりも1歳年上）の社会的地位の高い、同じく亡命者のフロラック伯（the Comte de Florac）と結婚させられることになっていた。トミーは娘の父親にも、義母にも勿論内緒で結婚しようとするが、ついに義母に見つかってしまい、宗教上の理由から（教皇派の信者などニューカム夫人にはもってのほかであるということ）猛反対されるに至る。

トミーはレオノールと二人ひそかに結婚式を挙げ、しかるのちインドに狂奔を企てるが、義母のニューカム夫人に先を越され、娘の父親にも知られてしまい、レオノールは「名誉」（honour）を守って伯爵と結婚させられ、トミーは義母と決裂し、父のニューカム氏とは身を引き裂かれるようにしてインドに立ち去り、その後二度と両親の顔を見ることがない。（第1章の「調和の洞窟」（the cave of Harmony）という酒場で、このトミーがニューカム大佐となって、インドから帰還するのは、実に35年ぶりである。ちなみにこの時ニューカム大佐が連れているのが、語り手「私」の学校時代の友人で、暫く会わないでいた彼の息子クライヴ・ニューカム君（Clive Newcome）である。）

さて長々と経緯を話すことになって恐縮だが、要点は、作者サッカレーが、トミーの一生を決定すべく、ここにフランス式結婚制度を取り入れ、トミーの情熱を「名誉」なるものの犠牲に供していることである。トミー本人はいささかもこのフランス式「名誉」なるシロモノは意に介さず、自分とレオノールとの結婚の障害だとは少しも考えないのであるが。

ついでに、サッカレーを最眞とされる諸氏は、ここで『イギリス俗物誌』（*The Book of Snobs*, 1846-47）にいう「俗物と結婚」のくだりを思い起こされるに違いない。そして作者ならずとも、俗物根性の犠牲になって結婚がご破算になったり、愛していても別れざるをえないという結末に涙を禁じえまい。サッカレーがこれら彼の周りに日常頻繁に見出される俗物を不幸に駆り立てる張本人の俗物根性、つまり「いまわしき俗物大王」

(the infernal Snob) に「一寸法師トム・サム」(Tom Thumb)^{註2} の如く打ちかからんとする意気込みにしばし耳を傾けておくのも無駄ではあるまい。「いまわしき俗物大王」はわれらが上に君臨して、かく号令を発し、われら俗物を不幸に導いてゆく――

「なんじ小間使なくして結婚するなかれ。なんじ馬車なくして結婚するなかれ。なんじ小姓服の給仕、フランス生まれの子守女なくして妻を愛し子を膝下に置くなかれ。なんじ最新流行のブルーアム馬車を買わずんば生きるべからず。貧乏人と結婚すべからず。社交界はなんじを見捨て、親戚縁者はなんじを犯罪人として遠ざけ、おば、おじは眼をそむけて若気のいたりを嘆き悲しむべければなり。」

おお妙齡の淑女よ！よろしくしゃあしゃあと体を売って金持じじいと結婚すべし。おお適齡の青年よ！よろしく我が身をウソで固めて金持やもめを狙うべし。もしも諸君にして貧しきことあらば、まことに禍いなるかな！かの残忍きわる独裁者たる社交界は、諸君を孤独の破滅に追いやる――されば、あわれな女よ、屋根裏で干からびよ！あわれな男よ、クラブで朽ち果てよ！^{註3}

イギリス国内においても俗物根性に支配されると如何なる結末になるかをかくの如く嘆くサッカーであってみれば、フランス式結婚の犠牲に供せられる若者たちへの憐れはひとしおであろう。

だがこのフランス式結婚方法の犠牲に供せられるのは、なにもサッカーのトミー一人のことではないのである。続いてイギリスにシェイクスピア以来の「喜劇精神」(comic spirit) の復活を説き、それを己の作品を通して具現した男、ジョージ・メレディスとその作品『ビーチャムの生涯』(*Beauchamp's Career*, 1874-75)^{註4} のことに話を移すとしよう。

メレディスはおそらく彼の先達サッカレーの『ニューカム家の人々』は読んでいたであろう。それよりも十年ほど後のこと、メレディスは『ビーチャムの生涯』の中で、海軍士官候補生のネヴィル・ビーチャム (Nevil Beauchamp) というイギリスの若者をして、これまたフランスの16歳の絶世の美女、しかもフランス式結婚制度に基づいて既に婚約させられている娘、ルネ (Renée) に恋い焦がれさせているのである。

ネヴィルはイギリスとフランスの名門の血を引く、将来を嘱望された若者であり、クリミア戦争のため地中海へとやって来、その勇敢さから自らのたてた手柄でないものまでネヴィルの手柄として母国に報告され、その名を誉めそやされているが、本人はそのような評判がいささか気に入らず、大陸に踏みとどまり、フランス陣営に起居を共にして、叔父からの食料をフランス軍に分ち与えていたが、フランスのクロワスネル伯爵 (Comte Cresnes de Croisnel) の息子ローラン (Roland) の命を救ったことで、伯爵から本国への帰途に息子共々イタリアのヴェニスに療養すること嘆願され、妹のルネも同伴することになった。

ルネと兄のローランと共にゴンドラに揺られる日々を過す中で、ネヴィルはアルテミスと見紛うばかりの美女ルネの虜になっていく。兄のローランはわざとルネとネヴィルを二人っきりにして、ゴンドラを降りたりするが、勿論そうすることは、年若くして既に父親の命令で、ルアイユー侯爵 (Marquis de Rouaillout)、しかもフランス式の御多分に漏れずルネのゆうに倍くらい年長の男、と婚約していることへの、ある種の批判を含んでいる。できうれば命の恩人であり、親友となったネヴィルと妹を結び合わせてやりたい。

事情をローランから知らされたネヴィルは、フランス式の結婚制度 (French system) は不当であり、父親の命令に従って、途方もなく年の離れた男と結婚する必要はまったくない旨を語り、自分の情熱を受け入れてくれるようにルネを説得するのである。ところが、である。ここがメレディ

スが先輩のサッカーを継承しているとおぼしきところなのだが、年の親子ほど違う相手との婚約という共通点もさることながら、「名誉」、さよう「名誉」にかけて、ルネは父親がした約束を反故にするようなことは出来ぬと、ネヴィルの言い寄りを拒絶する。

勿論、そういうネヴィルを心の内で思っているのは読者にも知らされるのであるが、結婚というものを、イギリス式にもっぱら本人同士の恋に基づくものとするような考えを抱いたことのないルネは、自分のネヴィルへの感情をこれまではもう一人の兄に対する親しみの情くらいにしか考えられなかった。既に婚約者の身であってみれば、ネヴィルへの情けが心の内で眼を覚ましたとしても、それを恋の情けと文字通り受け取るようには教育されてはいない。しかもルネは名にしおうフランス修道院で教育を受けた信心深い乙女である。

その信心深い乙女が、である。メレディスの言葉を借りれば、「まるで散った火花が枯葉に火をつけると、それが蛇のように身をくねらせてめらめらと燃え進み、突然ぱっと燃え上がるように、」（第7章）^{註5} これまで枯れ切っていた情けに火がついて身をくねらせることになるのである。即ち恋の情けをはじめて知ることになるのである。さて、世間体を重んじる「名誉」なのか、はたまたは己の心に忠実な「情け」なのか。ルネの取るべきは一体どちらなのか。読者は固唾を飲んで見守る。イヤ、そうしているのは、一人のイカレた読者だけなのかもしれない。こういった類のストーリーは、毎晩トレンドー・ドラマで見ていよ、というのが今どきの女子学生諸君の言いぐさではあるまいか？

イカレた読者であっても何でもよい。固唾を飲むほどこちらを引き入れるのがメレディスという小説家の筆捌きだから仕方がない。こちからは喜んで引き入れられるまでのこと。それじゃ批評にはならないよ、というのであれば、批評家なんぞ辞めてしまったほうがまだ。

いや、年甲斐もなく興奮して失礼致した。この先ルネとネヴィルがどうな

るのかを、そのさわりの部分だけを話しておこう。かの有名な、否、有名でも何でも無い、だが知る人ぞ知る、「アドリア海の一夜」(第8章)である。

ネヴィルの祖国における保護者は、彼の叔父エヴァラード・ロンフリー卿(the Honourable Everard Romfrey)である。これがまたイギリス貴族の例に漏れず、大の保守派であり、はたまた大のフランス嫌いときている。彼はまたこのようにも思っている。イギリスが「商売人」のスノップとしてフランスの笑いものになっている原因を作ったのは、マンチェスターの商売人どもであり、彼らがイギリスを墮落させているのである。その彼らを率いるのが彼の大好きな進歩派であって、イギリスのクリミア戦争への参戦に不平を唱えているのもまさに奴らなのだ。

であるから、戦争には一応勝利を収めた以上、甥のネヴィルがさっさと戦地から引き上げてきて、政治にうって出、眼の上のタンコブである進歩派をたたいて欲しいと願っているのに、こちらが送る食料を、こともあろうにフランス陣営などで振る舞い、挙げ句の果てはヴェニスでフランス貴族の一家と療養しているときは、許し難き所業である。そこで、あることからロンフリー卿の館に同居することになった、まだ中年にはほど遠い、未亡人のロザモンド・カリング夫人(Rasamund Culling)が、代役でネヴィルに逢いにやって来る。このご婦人はひそかにネヴィルのことを愛しているのだが、自らにはこのかなわぬ恋を「母の愛」と言い聞かせ、忍んでいる。

前置きが長くなって恐縮である。さて、カリング夫人を誘って、ネヴィルと兄のローランと四人で、夕暮れから兄がチャーターしている漁船に乗り込み、アドリア海で一夜を明して、翌朝ヴェニスの沖合からヴェニスに昇る朝日を見ようという計画をたてるのが、ルネである。

そのルネを追って今にもヴェニスにやって来ることになっているのが、婚約者の侯爵なのである。果たせるかな、ルネたちを乗せた船が運河の岸を離れるやいなや、息せきって駆けて来た召使が、侯爵の到着を告げる。ついで間もなく侯爵その人がルネの父と共に駆けつけ、船を留めようとする。これ

をルネは拒絶し、「船はすでに岸を離れた」というルネに加担して、兄のローランは、逆に侯爵と一緒に一夜を如何かと誘いをかける。侯爵は夜を明してまで朝日見物をするという狂気じみた船旅の申し出を辞退する。

かくて「婚約者の目の前で、恋人に連れ去られる」ことを自らに許したルネは、船端にその恋人のネヴィルにぴたりと寄り添う。これまで何とかしてネヴィルを避けようとしてきたルネの態度は、ここで逆転し、婚約者の侯爵はむしろルネの「輕蔑」(contempt)の対象となり、ネヴィルの方が彼女の甘美な「憐れみ」(pity)の対象となるのである。そしてこの態度の変化に驚くのが、当のネヴィルその人である。

さて、お待ちかね、ここで我らが漱石殿に御登場願おう。『草枕』で出戻り娘的那美さんに画工が読んで聞かせてやるのが、知るひとぞ知る、この場面なのである。メレディスを漱石が特に好んだ理由は後ほど述べよう。まずは漱石の見事な意識を、那美さん共々聴くことにしよう。

「情けの風が女から吹く。声から、眼から。肌（はだへ）から吹く。男に扶（たす）けられて舐（とも）に行く女は、夕暮れのエエニスを眺むる為めか、扶くる男はわが脈に稲妻の血を走らす為めか。．．．．．」^{註6}

「女は男とならんで舷に倚る。二人の隔たりは、風に吹かるゝリボンの幅よりも狭い。女は男と共にエエニスにさらばという。エエニスなるドウジの殿楼は今第二の日没の如く、薄赤く消えて行く。．．．．．」

「エエニスは沈みつゝ、沈みつゝ、只空に引く一抹の淡き線となる。線は切れる。切れて点となる。蛋白石（とんぼだま）の空のなかに丸き柱が、ここ、かしこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘楼（しゅろう）が沈む。沈んだと女が云ふ。エエニスを去る女の心は空行く風の如く自由である。去れど隠れたるエエニスは、再び帰らねばならぬ女の心に羈絆

（きせつ）の苦しみを与ふ。男と女は暗き湾の方（かた）に眼を注ぐ。星は次第に増す。柔らかに揺ぐ海は泡を漸濺（そそ）がず。男は女の手を把る。鳴りやまぬ弦（ゆづる）を握った心地である。・・・・・・・・」

「・・・・・・・・——この一夜と女が云ふ。一夜？と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそと云ふ」

「——真夜中の甲板に帆綱を枕にして横はりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確（しか）と把（と）りたる瞬時が大波の如く揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男は眼を閉づる。——」

「女は道に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ様である。攫（さら）はれて空行く人の如く、只不可思議の千万無量——・・・・・・・・」

以上がルネとネヴィルのアドリア海での一夜を叙した部分の、おおよその意識である。

さて、ルネとネヴィルの御兩人にとって二人っきりになれるのは、文字通り、「一夜」のみであって、ルネは、結局サッカレーのトミーが愛したフランス娘レオノール嬢がそうしたのと同じく、侯爵との結婚を「名誉」の為に果たすことになる。イギリス人ならずとも、否レオノール嬢やルネ当人ならずとも、一抹の「憐れ」をトミーやネヴィルに感ぜずにはいられまい。そして勿論レオノール嬢やルネにたいしても。

以上がサッカレーとメレディスを通して見る「フランス式結婚」の小説に現われた具体例である。これらに共通して推量しうることは、そうしたフランスの結婚制度をイギリス人は決してよくは思っていないということであ

る。メレディスの場合などは特に批判的で、フランスがイギリスのことを「商売人」のスノップの国と呼ぶことへの意趣返しでもあるかのように、この「フランス式結婚」を、ネヴィルを通して揶揄している。人間の自由をフランスに先駆けて獲得したイギリスにとって、フランスこそは、野蛮さのいまだに支配する国であると見做されたとしても不思議ではない。両国のいがみ合いと対立は以外に根が深いといわねばならない。少なくともそうしたコンテクストのもとに、これらの小説は読まれる必要がある。

すぐさまここでヘンリー・ジェームズに話を移すと都合なのだが、すでに漱石に登場を願って、待たせてあるので、こちらをほおって置くことは失礼である。まずは漱石殿の続きをお話しよう。

メレディスの「アドリア海の一夜」を漱石に意識してもらったのは、ほかでもない、それが漱石的主题を見事に集約していると思うからである。『草枕』に登場する出戻り娘的那美さんこそ、「フランス式結婚」の犠牲に供せられた女の、漱石における典型だからである。那美さんは、愛する人がいたにもかかわらず、家の勧めにより金持ちの男との結婚を余儀なくされたのであった。しかし夫の勤めていた銀行がつぶれたのを潮に、夫と別れ、故郷の田舎に帰って来、目下旅館の女将をしながら、寺の和尚の指導の元に、迷いをなくすべく心の修行をしているという。

那美さんには同じような経歴の先達がいたそうで、峠の茶屋のばあさんが画工に語るところによると、その女は長良の乙女と言って、二人の男に懸想され、いずれを選ぶことも出来ずに、「あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」（大意：「秋になると尾花の上に置く露のように、消えてしまいそうにも私は思われます」^{註7}）と歌を残して、淵川へ身を投げて死んでしまったそうである。那美さんがこの長良の乙女の二の舞をした訳ではないが、長良の乙女の身の上は那美さんのそれに重ねられ、語り手の画工の心内では、ラファエル前派の一人ジョン・エヴァレット・ミ

レーの描く乙女、川に身を投げて浮び流れ行く『ハムレット』の可憐な娘オフィーリアの姿、と重ね合わされることになる。

さて『草枕』は、語り手の画工が、希求する「非人情」の世界に少しの間でも浸たらんがため、と自らに言い聞かせて、妖艶なる出戻り娘的那美さんの発する魔力に抵抗する過程を描いた物語であるが、物語の中心人物は、何と言っても那美さんである。画工が那美さんに重ねてみるオフィーリアも、そういえば、愛するハムレットに疑いを抱かせるよう父親から仕向けられた憐れな女である。

自分の思う男を犠牲にして、何かの為に別の男との結婚を余儀なくされる女は、漱石の小説ではほかにも多くいる。例えば、『それから』の三千代は、男同士の友情の犠牲になって、愛する代助の友人と結婚をする羽目になる。同じく女の眼から見れば、『三四郎』の美禰子も愛する三四郎とは別の男と結婚するし、また『明暗』の清子にしても、好きだったであろう津田とは結婚してはいない。『行人』の一郎の妻お直にしても、おそらく一郎と結婚する前にその気があったであろうと思われる弟の二郎とは結婚していない。

視点を変えて同じテーマを男の眼から見ると如何であろう。『それから』の代助が好例である。代助は父の薦める結婚——家同士の利益を第一に考える結婚——を拒絶して、友人の細君、つまり、かつて愛した女三千代を結局は友から奪い取ることになる。代助の父は、明治維新以降西洋との闇取引の部分でかなりの財を蓄えたようであるが、息子の代助は、父や兄が金儲けの面では新しい世の中に功利的に順応しながら、道德面では旧態然として現代文明の進歩とはおよそかけ離れた儒教道德を押しつけてくることに堪えきれない。代助が三千代と敢えて結婚しようとするのは、父や兄が代表する家というものの価値に真っ向から立ち向かわんとするからである。

『門』の宗助と御米の關係は、『それから』の代助と三千代の後日談の形を取っているが、友から奪った女とその後の暮しは決して容易ではない。新

しい文明社会の中で自由に生きられるはずのものがそうはいかないで、道徳面では旧態然としている日本の社会の中にあっては、世をはばかって、小さくなって、人目に付かないようにひっそりと暮らしていかなければならない。そうした意味では宗助と御米の結婚は失敗である。時代の進歩とそれに伴って変化しない旧態然とした道徳体系——この矛盾と落差こそ、漱石の小説を貫くテーマの一つを構成している重要なエレメントなのである。

漱石が特にメレディスの小説に惹かれるのは、メレディスの小説が小説としての完成度が高く、人物間の心理の綾を心憎い筆致で描き出し、あるいは描き出さないでそれとなく暗示し、読者に想像力を駆使して謎の解読に参加することを要請するタイプの小説であるからというだけにとどまらない。

『ビーチャムの生涯』のルネとネヴィルの結婚を阻む旧道徳体系は、漱石の抱える同様の問題と符合し漱石を引きつけたに違いない。

メレディスの別の小説『エゴイスト』(*The Egoist*, 1879)においても、舞台はイギリス本国であり、例の「フランス式結婚」に基づくものではないが、父親の犠牲になって、年代物のポート・ワインと引換えに、すんでのところサー・ウイロビー・パターン(Sir Willoughby Patterne)というエゴイストの準男爵に売り渡されるところであった知性溢れる絶世の美女、読者諸氏をことごとく恋の虜にせずばおかなクレアラ・ミドルトン(Clara Middleton)をご記憶の方も多かろう。また別の小説『リチャード・フェヴァレルの試練』(*The Ordeal of Richard Feverel*, 1859)では、妻に親友と駆け落ちされたアーサー・フェヴァレル氏が、一人残された幼い息子を女という魔物から遠ざける為に作り上げた教育システムでもって、息子を偏った人間に仕立てあげようとするが、これなども、漱石の『それから』の代助に対する父親の偏った儒教道徳教育と低通しており、漱石がメレディスのこの作品からかなりのヒントを得ていると思われる節が数多くある。

さて、漱石とメレディスとのより細かい比較文学的研究をしようというの

が本論の主旨ではないのであるから、そのほうは別の機会に譲ることにして、^{註8}最後にヘンリー・ジェイムズと「フランス式結婚」についてお話しせねばならない。そして私が特に念頭においている作品は、『アメリカ人』(The American, 1876-77)^{註9}である。

ジェイムズは1878年にメレディスと出逢って以来、小説家としてよりも、ウィットに富んだ知性溢れる人間性の面で、メレディスに対し特に深い愛情を抱き、ドーキング(Dorking)の田舎までメレディスに逢いにわざわざ出かけていくほどであった。^{註10}ただし両者の小説の文体という面では、甲乙つけ難いスタイリストであり、お互いに相手の文体の意味するところが不明と言いつけているエピソードもある。^{註11}

メレディスの文体は、一言でいえば、省略を旨とする文体である。これに反し、ジェイムズのは延々とした説明を旨とする文体である。メレディスは簡潔な言い回しを以て、読者にまさに「行間」を想像し埋めさせるを旨とするが故に難しい。ジェイムズは親切このうえなく、ちょっとしたことでも徹底して説明してくれるが、その説明が微に入り細に入るが故にそれについて行くのがこのうえなく難しい。メレディスも難しいがジェイムズも難しい。世界一難しい小説家だ。だがその難しさは、従って、まったく正反対の文体が招来させる難しさである。それでいてこれほど面白い、つまり読むこと自体が面白い小説家はいない、と正当な評価だけはしておこう。

一方ジェイムズとサッカレーのことは、すでに冒頭の方で少し話しておいたが、同じ自叙伝『ある少年と他の人々』のなかでサッカレーの『ニューカム家の人々』に言及した箇所もあるので、^{註12}ジェイムズがサッカレーのこの小説を読んでいたことは間違いないということを、念のため、付記しておこう。

さて『アメリカ人』であるが、この作品を真の意味で評価するには、従来からいわれているように、アメリカの〈イノセンス(無垢)〉対ヨーロッパの〈道徳的退廃〉といった図式だけでは足りないと言わざるをえない。それ

はその通りではある。だが、舞台であるフランスの特殊事情を考慮に入れないと、ジェイムズの意図するところが十分に理解できないのではないかと考えるからである。フランスの特殊事情とは、今問題にしている「フランス式結婚」という伝統的な結婚方法である。これがイギリス的でもなく、イタリア的でもなく、まさしくフラン式であるところに問題があるのである。

そして我々は、ジェイムズがそのフランス式の結婚方法の小説における先達として、サッカーとメレディスに負うところ多大であったことを、間違いなく想像しうるのである。

ではジェイムズの『アメリカ人』という小説は、一体如何なる小説であったのか。フランス式結婚にまつわる事柄を中心に少しお話ししよう。新大陸とその発見者にちなむ名前であることは勿論、ある意味では、サッカーのニューカム (Newcome) の名を継承するかとも思えるのが、主人公のアメリカ人クリストファー・ニューマン (Christopher Newman) 36歳である。彼はイギリスにおけるセルフ・メイドマンの典型ディック・ウィットintonのアメリカ版、つまりベンジャミン・フランクリンの末裔らしく、文無しから身を起こし、あらゆる職を転々としながら、やがてはアメリカ式幸運に恵まれ、(勿論言っておかねばならないのは、幸運のみにあらず、本人の努力と誠実さが神に嘉されたのであるが) 巨万の富を蓄えることに成功した後、次なる希望を叶えるべくフランスにやってくる。このニューマンをパリのルーブル美術館がその中に迎え入れる場面で、小説の幕は切って落とされるのである。

時はナポレオン三世下、1868年の晩春である。そしてニューマンがヨーロッパに見出そうとしてやって来たその希望とは、「ヨーロッパの最良のものを入手すること」、また「偉大なものすべてを見ること」、そして「賢い人々がすることを自分もすること」であるが、その中でもとりわけその富にふさわしい洗練された芸術品としての妻を見つけ、結婚することであった。^{註13}

ところでそのような理想の女性を如何にして見出すかであるが、そこは

ジェイムズもぬかりがない。そのような女性を見出しニューマンに見合わせるという、フランス式見合を執り行うのが、ニューマンのかつての同胞で、いまや長らくフランスに住むトリストラム (Tristram) という男の細君である。この点——つまりニューマンがある女性に見合わせられるというフランス式媒体を経ること——が、皮肉にも、興味深い。トリストラム夫人はニューマンに向い、こう言うのである。「あなたは、この国でいうように、私に仲立をしてもらいたいね。」^{註14}

そしてトリストラム夫人がニューマンに世話しようというのが、サントレ夫人 (Mme de Cintre) という貴族の娘であり、その娘をトリストラム夫人がそもそも知っているというのがミソで、二人はフランス修道院で教育を受けた幼馴染であるという設定に注目したい。そういえば、メレディスのルネも修道院出たての娘であったことを、思い起こすのも一興である。

問題のサントレ夫人であるが、彼女はまたフランスでも由緒あるベルガルド家 (Bellegarde) の若い未亡人であるという点が、またもやミソなのである。こちらの方が大ミソなのである。なぜか。ベルガルド家というのは九世紀にまでその祖先を遡りうるフランス貴族の名門でだが、いまや貴族の例に漏れず、プライドだけは高く、金がない。そこで彼女はトリストラム夫人の語るところによると、「18歳の時、両親によって、フランス式のやり方に従って、不快な老人 (60歳) に嫁がされた」^{註15} のであるが、結婚後2年して伯爵と死別し、目下母親と兄の監視下におかれ次の獲物に網をはる彼らの持ち駒となっているわけである。さきほど私は「大ミソ」などと人騒がせな言い方をしたが、簡単に言えば、サントレ夫人はまさに「フランス式結婚制度」の犠牲者なのだと、言いたいだけなのである。

トリストラム夫人は、その話を聞いて怪訝な顔をするニューマンに、フランスでは母親に子供は絶対服従であり、個人の楽しみより、家の利益の為に行動せねばならない、と語る。^{註16}

これをクレール (Claire —— サントレ夫人の名前) の身内で、彼女の事

をよく理解している兄ヴァランタン（Valentin）の口から、ニューマンに語ってもらおう。

「それは小説の一章にも相当する出来事でした。彼女はムシュ・ドゥ・サントレに結婚の一月前に初めて会ったのですが、それもすべてが、詳細に至るまで、すっかりお膳立てをされしってからのものでした。妹は相手の人を見たとき蒼白になり、そして蒼白のまま結婚式の日を迎えました。式の前夜彼女は気を失い、泣き明しました。母は彼女の手を取って坐り、上の兄は部屋を行ったり来たりしていました。まったく忌むべき限りでしたので、僕は妹に、もしお前が絶対にいやであるならお前の味方をする、はっきりと言ったのです。すると（母と兄から）それはお前の知ったことではないと言われ、結局彼女はサントレ伯爵夫人となったのです。」^{註17}

これが「フランス式結婚制度」の、小説における、乙女を屠る真迫の姿である。

25歳の、聡明な美女、昔は親の生贄にされ今もなお捕われの身同然の美女に、しかしながら、己の「夢の実現」を見るニューマンは、まさにアンドロメダを救出するペルセウスという英雄神話の現代版、つまりトリストラム夫人の言葉を借りれば、「アメリカ鷲（イーグル）」によるクレール救出を実行に移そうとする。

英雄神話といえば、エーリッヒ・ノイマンというユング派の心理学者によると、それは「自我」の確立を象徴する行為だそうだが、^{註18} はたしてニューマンの「自我」の確立という英雄神話は成り立つのであろうか。そしてアンドロメダ＝クレールは自由を得ることが出来るのであろうか。しかも事はニューマンとクレール個人の問題だけではないのである。これは西欧という「自我」が旧大陸と新大陸の結合によって、確立することを示唆している。はたしてそのような英雄神話の再現は可能か。

果たせるかな、ニューマンは巨万の富の餌にベルガルド家が結婚を肯ふのを知る。が、もともとニューマンは貴族ではないところから、ベルガルド家の女達で一人でも貴族と結婚しなかったものはないといわれるほど富貴門閥を重んじるベルガルド家としては、この結婚に全面的に賛成ではない。風呂桶を造って金儲けをしたアメリカ人など、たとえ英雄であっても、出来得れば願い下げである。本来彼らにとっては、そうした男は卑しむべき存在ではない訳で、それよりも60歳の忌まわしい貴族の好色爺のほうが好いのである。そこで一旦は結婚に同意したものの、結婚直前になって強力な対抗馬の貴族が現われたのも手伝って、家の力のもとに、二人の間は引き裂かれることになる。サントレ夫人は修道院へ身を隠すことで、婚約者ニューマンに対してだけでなく、ベルガルド家に対しても、門戸を閉ざしてしまう。結局は、土壇場においてニューマンはベルガルドという由緒ある貴族の家という怪物の犠牲に供せられたのである。

我々は期待して見守っていた英雄神話の再現が見事に裏切られたのを知る。アンドロメダ＝サントレ夫人はというと、二度にわたって、フランス式結婚制度の犠牲となった。それだけではない。サントレ夫人がいみじくも姪に語ったことのある御伽噺——若い王子が憐れな美しいフロラベラ（Florabella）とついには結婚するというお話——は、サントレ夫人がこれまたいみじくもニューマンに語ったように、夢のまた夢でしかなかったのである。フロラベラは六ヵ月の苦しみののち王子に連れられて桃色の空の国に住み、これまでのあらゆる苦しみを忘れ去り、毎日500匹の白鼠に引かれた象牙の馬車でドライブを楽しむという。まるでシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』に出てくるクィーン・マブ（Queen Mab）という夢魔を思わせるではないか。しかし残念ながら、英雄神話同様、御伽噺も憂き目にあい、フロラベラ＝サントレ夫人という等式は成立しない。

彼女の先達を我々はサッカレーのレオノール嬢に、そしてメレディスのルネに見てきた。サントレ夫人はレオノール嬢やルネを継承する、極めてフラ

ンス的な犠牲者なのである。私が特に注意を促したいのは、ジェイズが先輩のサッカーやメレディスを継承しているという点である。つまり、サッカーやメレディスがあつてのジェイズだという点である。これまでのジェイズ批評の中では、こうしたイギリス小説の伝統——F. R. リーヴィスのいうジョージ・エリオットの伝統の継承^{註19}とはまた違った意味で——の継承という側面が、看過されてきたのではないか。

勿論ジェイズの主人公ニューマンは、イギリス人でもなければ、フランス人でもない。つまり、イギリス人のニューカムやネヴィルではない。ジェイズの批評家が幾度となく強調してきたように、ニューマンは新大陸のアメリカ人である。したがって、イギリス人のニューカムやネヴィルの受けた打撃とニューマンの受けたそれとは、同日の談ではないであろう。しかもひょっとすると神話の英雄像と御伽噺のフロラベラ像の再現をやつてのけ得たかもしれない人物である。だから彼らとは違った新鮮なインパクトを小説世界にもたらしえた。そしてそれはその通りであろう。だがそのように批評する前に、我々は、それはリーヴィスがいうイギリスの伝統とは違った、もうひとつ別のイギリスの伝統継承というコンテキストのもとにおいてのみ可能であつたのだということを、認識しておく必要がある。

ジェイズがこの小説でいわんとした倫理的価値の問題については、ここでは敢えて問わない。最後にサントレ夫人が修道院に身を隠すことに集約されたジェイズ特有の倫理感のことも、またニューマンがベルガルド家の秘密を知っても、それを利用して復讐をすることを断念する時の、ジェイズ的倫理感も問わない。^{註20}

私がここで強調したいのは、ジェイズがもう一つの伝統、つまり、サッカー、メレディスの伝統を継承しながら、フランス人とイギリス人の関係からフランス人とアメリカ人の関係へとパラダイムの組替えを、意図的に、行なうことによって、イギリス小説の伝統にネジのひと捻りを加え、新しい局面をその伝統に付加するのに成功した、ということだけである。(1995・6・1)

註

- 1 Henry James, *A Small Boy and Others* (Charles Scribner's Sons, 1913) p. 52参照。
- 2 “The Book of Snobs”, *The Works of W. M. Thackeray* (Smith, Elder, & Co., 1906), vol. 6, p. 419. なお「一寸法師トム・サム」はサッカーの尊敬する大先輩ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) の劇作の同題名に由来する。
- 3 斉藤美洲訳 筑摩世界文学体系『サッカーいぎりす俗物誌』75頁。
- 4 1874年8月から1875年12月にかけて *Fortnightly* 紙上に分冊シリーズで掲載。掲載完了後直ちに三巻本で Chapman and Hall から1875年に出版されるも、出版年は翌年 (1876) と印されるという経緯がある。J. A. Hammerton, *George Meredith—His Life and Art in Anecdote and Criticism* (Edinburgh, 1911) p. 28参照。なぜ詳細な出版年代にこだわるかということ、次に述べるヘンリー・ジェイムズが *The American* (『アメリカ人』) を *Atlantic Monthly* 紙に掲載したのが1876年6月から1877年5月であり、従ってジェイムズは『アメリカ人』執筆の前に、ゆうにメレディスの『ビーチャムの生涯』を読むことが出来たはずであるということ、を確認しておきたかったからである。しかもメレディスの小説のシリーズが完了して直後ということは、ジェイムズにとってそれだけに強い影響力があったはずである。
- 5 “like a spark crackling serpentine along dry leaves to sudden flame” (George Meredith, *Beauchamp's Career*, Chapter 7, 1912 Memorial Edition)。
- 6 新編集による岩波 漱石全集 第三巻 1995。以下の引用はすべて同書より。
なお新漱石全集の註にはメレディスの該当箇所がオリジナルの英文で掲載されているので、そちらを参照されたい。
- 7 中西進『万葉集』(講談社 昭和59年)の口語訳。
- 8 目下漱石の『草枕』とメレディスの『ビーチャムの生涯』との比較文学的研究

で、最も用意周到になされているのが、飛ヶ谷美穂子氏の〈『ビーチャムの生涯』と漱石——『草枕』の『西洋本』〉(『比較文学』第37巻、平成7年5月)である。

- 9 ジェイムズは敬愛するメレディスの小説をきっと読んでいたと思える。註4参照されたい。
- 10 Leon Edel, *Henry James: The Treacherous Years 1895-1901* (Rupert Hart-Davis, 1969) p. 124参照。
- 11 V. S. Prichett, *George Meredith and English Comedy* (Chatto & Windus, 1970) p. 13参照。
- 12 前掲書 Henry James, *A Small Boy and Others* p. 53.
- 13 Henry James, *The American* (Penguin Classics, 1985) p. 71. 以下引用はすべて同書より。
- 14 同書71頁。
- 15 同書74頁。
- 16 同書120頁参照。
- 17 同書154頁。
- 18 エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』(上)(林道義訳 紀伊国屋書店) 199-272頁参照。
- 19 F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Chatto & Windus, 1962) Chapter 3 参照。
- 20 F. R. リーヴィスのいうイギリス流の倫理感とジェイムズに特有のピューリタンの倫理感の相違については、拙論「ジェイムズはヴィクトリア朝作家の一人なのか——ジェイムズの倫理観の特殊性について——」(『天理大学学報』129輯 昭和56年3月)を参照されたい。